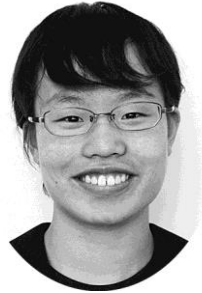


(添付資料 1)

最優秀賞
文部科学大臣賞



正々堂々

福島県須賀川市立第二中学校
二年 須田 日菜子

地元のプロバスケットボールチームの試合を観に行ったときのことだ。

その日の対戦相手はお世辞にも強敵とはいえないリーグ下位のチームで、私達も「勝てるぞ！」と応援に力が入っていた。

試合は後半になっても地元チームが優勢に運び、応援する私達がとても盛り上がっていたその時、観客席が少しざわめいた。見ると、私のいる席から少し離れたところで、年配の男性が一人立ち上がり、怒気をはらんだ声で周りに呼び掛けている。

「どうしてそんなみっともないことをするんだ。それでも日本人か君達は！」

今日、バスケのゲームにおいて、相手のチームがフリースローを打つときに観客が大声でブーイングをしたり、シューターの前でグッズを振ったりして集中力をそごうとする妨害行為はごく当たり前だ。おじいさんはそれを許せなかったようだった。しかし、クライマックスを迎えているゲームの真っ最中。そんな彼に示した周りの態度はかなり冷めたものだった。プロスポーツの応援でそこまでフェアにこだわらなくても。そんな声が聞こえる。

確かに相手は劣勢で、敵地であるが故に応援にきているブースターも少なく、同情したくなる気持ちはわかる。取りようによっては嫌がらせとも思える応援方法に義憤を感じたのかもしれない。でも、こっちがアウェーなら同じことされるよ。ルールには何も抵触してないんだから、これは許容された応援なんだ。私も初めはそう思った。だが、おじいさんはさらに続けた。

「正々堂々と戦ってこそその勝利だろう。」

その時、胸にちくりとした痛みを感じた。その通りだ、と思ったのだ。もしかしたら、みんなと一緒に相手にブーイングをしながらも、私は心のどこかでこの妨害応援に対して違和感を覚えていたのかもしれない、という戸惑いがよぎった。

「うるさいよ、じいさん。水をさすようなことするなよ。」誰かが耐えかねたように怒鳴った。おじいさんは怒鳴り返した。

「応援するのは、味方を鼓舞することであり、相手を邪魔することではない！」

私は思わず立ち上がりかけ、拍手をしてしまった。あ、と思い慌てて腰を落とすと、周りの人達がポツ、ポツと拍手をし始めた。決してみんなが、と言える数ではなかったが、それは試合中の応援席に起こった、異様な光景だった。そしてその異様な光景はゲーム後も私の心に残り続けた。

応援とは、味方を後押しするものだ。相手の邪魔をすることではない。

毎日、毎日、私達の日常には競争が待ち受けている。部活動でのレギュラー争い、校内外の様々な大会に、生徒会選挙。友人との関係構築も競争と無関係ではありえない。何より、高校受験に向けた学業成績は「順位」という明確な結果で優劣を突きつけてくる。そのたびに、私達は自分自身や自分の好きな誰かを応援し、ライバルに勝ちたい、と思っている。

中学生の私達の日常ですら、これだけ多くの「戦い」があるのだ。これから行く先、大人の世界は誰かと何かを争いながら得ていかなければならないもので溢れているに違いない。政治や会社運営で実権を握るための争いはどれだけ厳しいものかは、テレビのニュースや国会中継を見ているとよくわかる。

勝たなければ何も成し得ない。きれいごとでは済まない、という大人の言葉に嫌悪感を抱くほど、私達も幼くない。それでも、あの時のおじいさんの言葉を私は、大切にしたいと思う。もしも誰かを応援するときは、決して相手方をおとしめたり、その人の努力を妨害したりするのではなく、応援している自分の仲間がよりいっそう頑張れるように、勇気づける応援をしたい。それは同時に、私自身への約束、応援でもある。この先の人生で誰かと何かをかけて争わなければならないことがあった時、私はやはりライバルになる相手と、正々堂々と勝負したい。私は全力をもって臨む。ただし、相手の悪口を言うことや相手の努力を妨害するようなやり方はしない。簡単ではないことはわかっている。それでも、あの時のおじいさんの言葉を忘れずに、私は、誰かを応援し、自分を応援できる大人、そしてあのおじいさんのような自分の意見を曲げずに述べ、人の心を動かせる大人を目指そうと思う。